

フィールド風

(現場)からの風

宮田守男

ばれてきた日本。しかし、いま多くの地方では、高齢者すら減少し始め、しかも若い女性が職場を求めて流出し、いびつな社会構造が、日本全体を縮小しようとしていて、空の危機だ、との現場で詳細なデータ分析をした内容だった。

地域に若年女性が必要と考えるみませんか

2012年の数値・100人で全国ワースト1位、そして2035年厚生労働省がまとめた保育所持機児童数がダブルに多い1万1589人で全国ワースト1位の東京都に若年女性

「極点社会」という言葉が気になっていた折、NHKのクローズアップ現代で「拠点社会」として新たな人口減少「イシス」の番組を見たことができた。内容は、少子高齢化がま

くは正規雇用、働く事を希望してもかなわず現実には、単身若年女性の3分の1に当たる10万人の年収は、114万円未満で貧困層レベルの生活を余儀なくされる格差社会の現状は、他人事じやないとの報道も聞かれる。

自然が素晴らしい中で、安心して観光現場で活躍できる女性に対して、一番求められている、子育て環境を充実できるのか。単なる、教育や福祉の観点でない人口減少社会に対応する地域環境を作り出しているのか、その視点が大切だ。地域に若年女性が増えれば、人の結びつきが増え、定住人口の増加など地域も活気ある社会になるだろう。

4月に人口問題研究所が発表した世帯数の将来推計によると、世帯主が、65歳以上の高齢世帯は2035年に40・8%と初めて4割を超え、その世帯の3分の1以上が一人暮らしとなり、多くの課題が生じると指摘した。

5月初旬、ソフトボール審判員として派遣された伊那市で開催された高校女子ソフトボール大会でも生徒減による選手確保の話が多く聞かれ、高齢

審判員からは「妻に先立たれたらどうやって毎日を過ごしていくのか、すべて妻任せの生活を真直さなければ、この切実な声も当たり前のように聞こえてくる。一人一人が、直面する課題はさまざま。それは、個人の事と違ってはいけない社会に、今、生きている事をどう理解していくのか。地域を元気ある方向に向かわせるために、どのような戦術を展開していくのか。地域内で使われる公的な費用を、どのように使っていくべきか。真剣に考えほしい」と語っている。

(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)



白馬村・森上地区の春祭り。地域が年々高齢化するのが実感できる。

私たちが身近でも、確かに感じ当たる事が多くなってきた。すでに全国の20%に当たる自治体で高齢者が減少し始めている。地方経済は、高齢者の購買力で維持されている現状が多いと聞く。高齢者減っていく、これまで経験したことがない、人口減少社会で地域経済が衰弊する中、これまで地域の若年女性の雇用の受け入れ職場として、医療・福祉・介護の現場は一定の役割を果たしてきた。しかしその現場での雇用も、今後地方では厳しくなるといわれている。

全国の多くの社会福祉法人で福祉施設を経営する関係者は、東京圏に施設を建設するため積極的に進出しているといえられ、これに伴って、地域の若年女性を首都圏で勤務さ

せる雇用要請も活発化してきている。特に福祉や介護現場の雇用案件は、決して恵まれた内容ではない。勤務内容は家族も心配するほど過酷で、少しでも労働条件の良いところできれば都会の露伴気も味わいたいという地方の若年女性の思いも理解できてしまう。なだらかな人口移動でない、急激な変化に直面する地方にとって、対応するにはどんな知恵があるのだろうか。

松本で、夕方から始まる会議に出席して、食事会をする時間帯の制約もあり大系線での帰りが困難になることが多く、定宿としてい

るビジネスホテルがある。スタッフ全員が女性。きめ細やかな接客。船内の清潔感。何気ない一言に心温まる

ことが多く、これらを